

花高同窓会会報



第109号

発行 平成27年2月27日

秋 田 県 立 花 輪 高 等 学 校
同 窓 会 事 務 局

〒018-5201 鹿角市花輪字明堂長根12

TEL0186-23-2126 FAX0186-23-2137

URL <http://www.ink.or.jp/~hanakoudousou/>

印刷 (有)大館孔版社



花輪スキー場

記念寄稿

『来るべき社会人になる時の為に...』

旭日小経章叙勲

阿 部 佐太郎 (定11普)



寄稿依頼に「叙勲されての感想と花高の後輩たちに期待するもの」とありますので：。

叙勲については、身に余る光栄でありまして謹んでお受けいたしました。しかしこの受賞は、私個人に与えられたものではなく、長年にわたって私を支えて下さった多くの方々へのご褒美であると思っております。その為、喜びというより叙勲の重み（支えて下さった方々一人ひとりの重み）を今全身でずしりと受け止めておるところです。又、残された人生の生き様を試されているようでもあり、益々精進を重ねていかなければならないものと思っております。

「若き後輩たちに期するもの」については、いつもその活躍ぶりに、目を細め声援を送っておりますが、とりわけ女子駅伝の活躍ぶりには、沢山の感動を頂きました。過去には、プラスバンド部が全国の舞台で金賞を受賞された歴史がございましたが、今その活動はど

うなっているのでしょうか？できれば年に一度、先輩たちとのコラボで市民に公開して頂きたいと願っております。

「来るべき社会人になる時の為に：」は、文学と言えば大げさになりますが、気楽に好きな本を読んで頂きたい。小説の中の主人公と共に悩み、憤り、冒険する事の積み重ねが、いつしか己の人格が培われ、育まれ身についていくものと確信しております。したがって、社会に出て多くの事象に邁進しても、本の中で得た多くの体験、修練が身についておりますから、あわてずに応用できるものと思っております。

私は映画全盛時代に夜間高校で学び、本を読む事と映画を観て、評論家になった積もりで仲間と論じ合った青春でした。そしてそれが今日の私の全てであります。花高生諸君、若いうちに小説の中で多くの人生経験をしてはいかがですか!! 明日の為に：。

【プロフィール】

旭日小経章叙勲。
(地方自治功労)
昭和15年生まれ。
昭和60年に初当選し
以来、7期28年に
わたり鹿角市議会
議員。平成15年4月
から平成17年3月
まで議長を務めた。
全国議会議長表彰など
受賞。



【プロフィール】

呉 徳洙 (オ・トクス)
1941年生まれ。1965
年早稲田大学卒業。
1966年『白昼の通り
魔』の助監督を務め、
その後も数本の大島
渚監督作品に助監督
として携わる。1968
年東映製作所に入所。
『エイガール』などの
テレビ作品を手がける。
制作プロダクション
OH企画を設立し、
『指紋押捺拒否』を
発表。以後、戦後在
日50年を記念して制
作された『在日』は、
在日史のみならず、
戦後日本史とも評さ
れる作品である。

人間は誰しも、失敗することを目的に仕事をする人はいまい。しかし、人間は必ず失敗をする。そして、その失敗からさまざまなことを学ぶ。私もこれまで、失敗から多くのことを学んできた。むかしのことである。二十代半ばのころ、私は大島渚監督の映画『白昼の通り魔』(武田泰淳原作)の撮影現場にいた。ロケ地は信州の山奥で、撮影現場は生まれて初めての体験である。案の定、いろいろな失敗をやらかした。今思うと、中にはそのいじらしさに自らを抱き締め、たくなるような失敗もあった。例えば、こんなことがあった。戸浦六宏という役者がいた。その戸浦さんが大木に荒縄を巻きつけ、首吊り自殺をするというシーンを撮っていたときのことである。駆け出しの私はサード助監督で、小道具係を担当していた。絶対にあってはならないことなのだが、私は戸浦さんの「つながり」の草履を宿に忘れてきてしまっていた。現場に着いて初めて分かった。アタマは真っ白。もう何も分からなくなつて「スミマセン！」のひと言を発するや衝動的に山を駆けおりていた。宿まではかなりの距離である。季節は六月の蒸し暑い梅雨どきで、汗は流れる。涙は出てくる。そして、草履を抱えて今度は山の上り。箱根大学駅伝でもあるまいに：。こんな

特別寄稿

『失敗のすゝめ』

映画監督 呉 徳洙 (高12期)

な情けないことはない。芥川龍之介に『トロツコ』という短編があるが、まさに泣きながら走つて家に帰る良平少年の青年版である。ようやく現場に着くと、スタッフは別の場所での別のシーンを撮っていた。大島監督が烈火のごとく怒るかと思つたら「徳さん、あれは終わったよ」のひと言。肩透かしを喰らい、ワケを訊くと、戸浦さんが落ちるところはシルエツトで分らない。首吊りでブラ下がつているのを足からパン・アップしたかったのだが「足を切つて」撮ったというのだ。「あゝ、そうか、映画にはサイゾつていうのがあるのか！」と初めて知った。それほど私は映画撮影に関してはズブの素人だったのである。フランスの昆虫学者・ファーブールが子供のころ、太陽に向かって口と目を交互に閉じたり開けたりして、太陽が見えるのは目であることを発見したというウソのようなエピソードがあるが、やゝそれに似ている。

私は、その後もさまざまな失敗をし、そこから学んだことが今も自らの滋養となつている。再度言う。人間は失敗から学ぶものである。どうかこれからの若者たちは失敗を恐れることなく、仕事に、人生に果敢にチャレンジして欲しいものである。

会員寄稿

『目指せ！日本一』

花輪かるた同好会

昨年11月1・2日に開催された第29回国民文化祭・あきた二〇一四の小倉百人一首かるた競技全国大会も無事閉幕した。この大会を裏で支えたのが、企画委員として企画・運営に携わった花高OGの4人の同好会メンバーである。鹿角市は「かるたの里」づくり事業を展開してきており、今回の大会は、全国に「かるたの里鹿角」を発信する絶好の機会でもあった。小学生の頃からカルタに親しみ、正月明けに開催される子ども会対抗かるた大会のために練習し、戦ったあの頃のマメ戦士たちが大会を支え、盛り上げ成功させたのである。現在は読み手となり、後輩を指導しながら、多くの有段者の育成にも力を注いでいる。

かつて、花高でも全校のクラス対抗のかるた大会が行われていて、休み時間とか放課後によく練習していたものである。とくに熱心に指導されていたのが小田嶋哲夫先生（高13期）で、現在も子ども会の大会などでは読み手として、その美声を披露している。



木村 葵 4段

その後継者でもある金澤麻耶（高28期）を中心に、高谷善子（高24期）、澤出直子（高29期）、湯瀬正子（高29期）の4人の企画委員の情熱、行動力、チームワークには頭が下がる思いであった。前回は、山梨県身延町で開催され、視察に同行させてもらった。競技の方は予選リーグ突破が叶わなかったものの、運営面では事細かに視察がなされ、大会に大きく反映されたのには言うに及ばない。今回は参加41都道府県の中、予選リーグを突破し、ベスト16。開催県としては面目躍如であった。今



やまなし国文祭・身延町視察



ベスト16（北鹿新聞より）



名人と一緒に

年から4段に昇段した木村葵（高64期）が参戦し、来年の鹿角島大会では日本一を目指してほしいものである。さらに個人として、滋賀県大津市の近江神社で行われる新年恒例の名人・クイーン戦に出場し、花高の名前を日本中に知らしめてほしい。駅伝、スキー、ブライアンに続く第4の星となることを願っている。また、今大会には多くの花高同窓会会員も協力し、携わって幕を閉じたことをご報告したい。

（奈良努）

関西支部

全国高校女子駅伝応援

関西支部長 坂本 信雄（高14期）

12月21日の全国高校駅伝競走大会は、前日までの悪天候から冬空とはいえ晴天のもとで京都市の西京極陸上競技場において開催されました。女子の部に秋田県代表として参加した花輪高校は5区間での競走を通じて、一時10位に食い込むこともありましたが、ゴールでは昨年の19位から順位を大幅に上げて、12位とこれまで最高の順位を記録しました。年明けの1月11日に開催される第33回都道府県対抗女子駅伝競走大会にも同校からの選手の出場が見込まれています。



関西支部主催の激励会

平成27年度 総会開催のご案内

- ・日時…平成27年5月17日(日) 午後5時～
- ・場所…鹿角パークホテル 2F鳳凰殿
- ・会費…4,000円
- ・申込先…☎0186・23・2126

担当・花輪高校 木村まで

卒業企画

『君に届けたい
一冊』

『私の読書歴』

杉江 宗祐 (高10期)

青年期は吉川英治や山岡荘八の時代ものや司馬遼太郎の本を貪り、公職にあつては時勢を見きわめ知識の糧とするため年間二百冊(今はこの1/4)もの書籍に接するという乱読派。その中で魂を揺さぶられたという衝撃的出会いはない。しかし、忘れ難き名著は沢山ある。『生命とは』赤堀四郎、『土光敏夫次世代へ申し送り候』、『宇宙の意思』根岸卓郎、『幾山河』瀬島龍三、岡潔愛国の随想集、梅原猛や塩野七生の書等々。思い出の一冊を選択とは厳しい。読むことは途轍もなく早く、刺激を受けた個処に折を入れ後日再読するクセがある。県庁へ出張しても二冊は目を通すのだが、二十年程前、会田雄次の『日本人の忘れもの』の頁を開き目を走らせていたら、精読すべき課題が多々あり折り目も増えた。日本民族は誇りを失ったのか、国民の精神構造は歪んでいく。社会が必要とする人間像とは、過った教育現状、親子の絆と道徳、現代人の忘れもの等々示唆に富む事柄が多く、その真髄は新渡戸稲造の『武士道』や藤原正孝の『この国のけじめ』と相通じるものがある。日本社会に対し鋭い考察と批評を下し、現代人に対しての警鐘と受け止めるべき名著と言えよう。(元鹿角市長・顧問)

『フツタのことは』

北村 正人 (高22期)

本との出会いは、人との出会いに似ている。旅先の街角で偶然出会った人が、生涯の大切な人となることがある。『フツタのことは』(中村元訳・岩波文庫)も、ある古本市で偶然手に取り買い求めた一冊だ。以来、何度読んだことか。この本は仏教の本ではない。ゴータマと呼ばれる二千年前に生きた青年が、人生の真理を求めて苦行し、ついに悟りを得た彼が人々に真理を語る。その言葉をまとめたものだ。第五章から成る。確かに平易な言葉ではないが、これから未来に向け、幾多の困難を乗り越えて行かなければならぬ高校生諸君には、いつか読んでほしい本だ。きっと人生観が変わり、生きるヒントと勇氣、そして知恵を与えてくれるだろう。(常任幹事)

『認めることの大切さ』
黒澤 香澄 (高38期)

かなりうる覚えとなっていますが、学生時代に手にとった『アルジャーノンに花束を』をあげたいと思います。手術によって知的障害者の知的能力を向上させるという現実とは到底かけ離れた内容でしたが、当時、社会福祉を学んでいた私にとっては、色々考えさせる一冊でした。

私は当初、「福祉」を「施し」的な上からの視点で捉えていました。また、ボランティア活動で障害者とふれあう機会もありましたが、普通に接することができませんでした。しかし、様々な経験を

とおし、障害等も個性の一つだと捉えるようになってからは戸惑うことも少なくなりました。

人間関係で大切なことは個性を認め合うことです。そして、個性を認め合うために最も大切なのは自分自身を認めることだと思えます。自分の居場所を自分の中に作ることで、人は強くなれるし、優しくなれると感じて(信じて)います。

本から得たものとはかけ離れたましたが、当時を思い出してみましたが、当時を思い出してみましたが、

(常任幹事)

卒業企画第3弾

『君に届けたい1冊』

人は誰でも、人生の中で本との出会いがあると思う。失敗した時、人生に行き詰った時、なんとなく手にした1冊が道を開く時がある。

『君に届けたい一冊』

阿部 浩一 (高30期)

誰しも色々な場面があり、その時に出会った本が自分の糧になっているということがあります。

恐らく絶版であろう本を人に紹介するのは心苦しいので、自分を救ってくれた本の思い出話になります。

二十代半ば、父の死、失恋などが一度に重なりとても辛い時期、たまたま本屋さんで手に取ったのが『信念』(ロバート・シエラー

著)という本でした。

その時の私は、悲しみにくれ、仕事も手に着かず、頑張ろうと思っても何を抛り所に頑張ればいいのかかわからず……

私は食べるようにこの本を読み、自分を悲しみや絶望に陥れているもの、それは起きている現象ではなく、全て自分の心であることが解った様な気がしたのでした。

人生は起きた出来事で変わるのではなく、自分の心の持ち方、ものの見方で変わると思っています。

若いときに自分を救ってくれた本に出会ったことに今でも感謝しています。

どんな名著も、名言も、自分に求めるものが無いと心には響かないものです。

苦しみや悲しみで何も手に着かない時、そんな時に求めた本が貴方を救ってくれるのだと思います。(常任幹事)

『歴史認識』とは何か？

奈良 俊夫 (高6期)

近隣諸国から、「日本人は歴史認識に欠けている」という批判が聞こえてくるようになって久しい。ところで、ここに言う「歴史認識」とは何なのだろうか。

私は、この言葉を自分の頭で素直な常識を基にして歴史の流れを把握することだと理解している。

われわれは、やゝもすると過去の事実を時代順に並べた記述を歴史と考えがちで、それらの事実が発生した背景、あるいは真の理由をあまり深く考えない傾向があるのではないだろうか。たとえば、聖徳太子の憲法十七条の制定は「和」の大切さを強調したもので

あると極めて平面的に説明されるが、当時、何故「和」を法の中に置かなければならなかったのか、そもそも「和」とは何かという点は、改めて考えたいものである。このような視点で歴史を見ようとする人に、私は次の本をお薦めしたい。

(花栄会・埼玉県加須市在住)

『本との出会い』

関 厚 (高24期)

本との出会いは人それぞれであります。私は高校卒業以来、十数回の引越しをしてきましたが、次の本を手元に置いてきました。

東洋史学者内藤湖南先生の著作はいずれも歴史に対する深い見識と洞察がありますが、特に「日本文化史研究」(講談社)は物事の

見方の多様性を教えてくれました。瀬川清子先生の「食生活の歴史」(講談社)は食物学の基本文献ですが、この中の山菜取りは雪解け、

の春の訪れが描かれています。学校では作文が不得意でしたが、社会に出ると毎日、文章を書かされます。梅棹忠夫さんの「知的生産の技術」(岩波新書)には発見の手帳、カードの使い方、文章の書き方などが書かれており、何度助けられたかわかりません。

清野克子先生の「平家物語」の那須の与一、「徒然草」の高名の木登りの暗唱も社会では大いに役立ちました。今でも忘れないような文庫本を持ち歩いております。

(花栄会・東京都足立区在住)

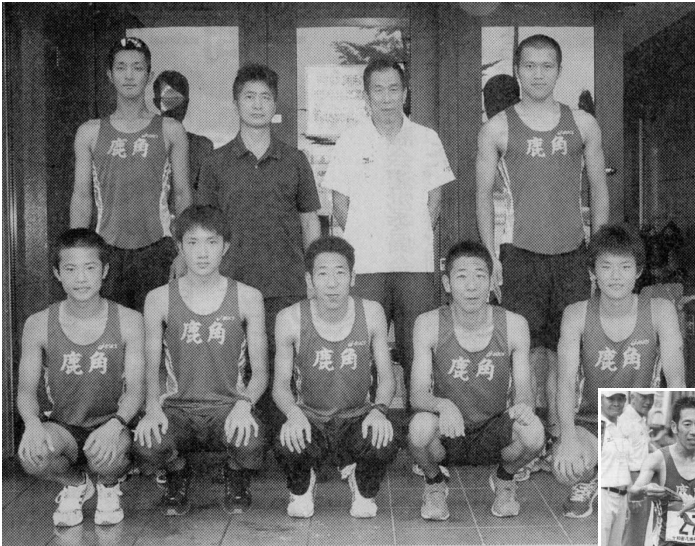
『ドリームチーム』結成!!

鹿角陸協

昨年(高63期)の8月7日、真夏の鹿角路を一本のたすきでつなぐ第67回十和田八幡平駅伝競走大会が開催され、花高OBの松宮兄弟、小板橋三兄弟のドリームチームが鹿角陸協として結成参戦した。

監督の桜田典彦(高16期)の「今考えられる最強のメンバー」と言われるように、1区の小板橋海渡(高66期)が11位で兄の大史(高63期)にリレー。17位でたす

きをもらった3区松宮隆行(高50期)は4人抜きのお走りで、双子の弟祐行(高50期)へ。アンカー小板橋天斗(高66期)が一つ押し上げ、フィニッシュしたと。
二〇一六年のリオ五輪を目指して頑張つてほしいものである。



チーム「鹿角陸協」(北鹿新聞より)



松宮兄弟の兄隆行が
4人を抜いて弟祐行へ
(北鹿新聞より)

創立90周年記念事業実行委員会始動!



平成28年10月9日(日)の式典・祝賀会には、是非出席して90周年を共に祝いたいものだと思ひます。尚、多くの会員が参集できるような企画も検討中です。

昨年12月11日の設立総会を経て、実行委員会がスタートしました。三役は
会長 井上 高廣 (同窓会長)
副会長 川又 久弥 (部活動後援会)
〃 黒沢 隆実 (PTA会長)
〃 石崎 國人 (学校長)
各部会の部長は、次の通りです。
総務部 佐々木幹夫 (同窓会)
事業部 佐藤 隆夫 (〃)
式典部 神田 昭治 (〃)
刊行部 三森 吉次 (〃)
祝賀会部 奈良 努 (〃)

スキーインターハイ出場及びジュニアアジア大会激励会

1月21日、同窓会役員が出席し、校長室で行われた。



スキー激励会 (北鹿新聞より)

ーよろしくお願ひしますー

第67期 学年幹事 (H26年度卒)

A組	齊 藤 公 稀	豊 田 香 澄
B組	〇石 井 真 由	石 鳥 谷 泰 生
C組	〇児 玉 栞	関 俊 輔
D組	小笠原 一 嘉	根 本 芙 美 佳

〇印は学年代表幹事

吉村 アイ (高19期) 会報委員長

雪国に生まれ育った者は、その気になれば普通にスキーを乗りこなせるものだと思ひました。



そんなこんなで三年間の授業で何時間練習できたのだろうか。ボーゲンもまともに滑れなくて卒業した。

『スキー教室』

雪が降ると体育の時間はスキー授業となる。場所とは水晶山スキー場。昭和四十年代ではリフトもない。今の道の駅「あん」とらあ」に校舎があった頃である。そこからスキー場までスキーを担いで一時間ぐらい歩いて、授業が始まると猛吹雪というのもよくあった。